

組合員にとって

震災復興の「プラットフォーム」

CVCが主催するボランティアバス

いわて生協 コープ・ボランティアセンター（CVC）

東日本大震災の被災地の暮らしを支えてきたいわて生協では、「被災地に行つてボランティア活動をしたけれど、個人ではなかなか行けない……」という人たちに活動してもらえよう、コープ・ボランティアセンター（CVC）を立ち上げた。CVCでは6月から、盛岡市と沿岸の被災地・大槌町^{おおつち}を結ぶボランティアバスの運行を行なっている。



がれきの撤去には重機による作業と、ボランティアができる人手による作業領域がある。

がれきを片付ける
ボランティアの胸に
去来する思いは

今も、あの日の海水をたつぷりと含んでいることが分かる硬い土くれに、ツルハシを打ち下ろし、スコップをかませながら、手作業でがれきを片付けていく。もちろん、がれきなどと十把一絡げ^{じっぱいしやくがら}に言ってはならないのだ。それらは、あの日、まで、人びとのくらしを守る家屋の一部であったり、愛着を持って使われていた什器^{じゅうき}であったかもしれないモノたちなのだから。偽りなく言えば、いまだ遠い道のりの



参加者はグループに分かれて、その日の作業現場へと向かう。



「ボランティアの心得」を知った上で参加しよう

金子さんはバスの車中で、「ボランティアの心得」について話した。

- 1 被災地での写真撮影は慎む。特に、被災者にはカメラを向けないこと。
- 2 作業を頑張り過ぎない。「またボランティアに参加して、頑張ればいいね」というぐらいの余裕を持って。
- 3 暑い日の作業では熱中症の予防を。特に水分補給は十分に。
- 4 ケガに気を付けよう。くぎの踏み抜き事故を防止する「中敷き」を用意して。
- 5 風が強い日は、ホコリが目に入らないようにゴーグルの用意を。
- 6 ボランティアに参加する場合は、「ボランティア保険」に加入すること。
- 7 自宅避難の人びとにとっては、周辺のがれきは大切な財産でもある。特に写真などの思い出の品は、ボランティアセンターに届けよう。

CVCのボランティアバスでは、「中敷き」やゴーグルを貸し出していた。また、取材当時、余震が続いていた現地では、津波注意報・警報が発令された場合には、速やかに高台に避難することが注意事項として挙げられた。

金子さんは毎回の「ボラバス」の最後を、「忘れない・伝える・続ける・つながる」という言葉で締めくくっているという。

いわて生協CVCのボランティアバスは、県外からのボランティアも参加できる。詳しくは、いわて生協のホームページ(<http://www.iwate.coop/>)から「東日本大震災に関するいわて生協の取り組み」の「組合員ボランティアニュース」を参照のこと。



「頑張り過ぎないで!」と参加者に語り掛ける金子さん。

6月26日(日)、いわて生協のCVCが催行した大槌町の被災地に向かうボランティアバス(通称「ボラバス」)は午前6時半、37人の参加者を乗せて、盛岡市の同生協・介護福祉センター「あい」を出発した。

初旬からは休日を利用して、勤労者山岳連盟などによるボランティアに参加していたという。生協もボランティアセンターを立ち上げ、ボランティアをコーディネートする必要を感じていた



6月26日早朝、盛岡のいわて生協・介護福祉センター「あい」を出発する参加者たち。

ニューズレターやメディアで情報を得て集まってきたボランティア

行く末が見える段階には至っていないが、それでも泥にまみれ、汗を流すボランティアの人びとの胸中には「これが『復興の手触りなのか』という思いが、去来していたのではないだろうか。

被災地に出掛け支援したいというニーズに応える

参加者はこの日、4つのグループに分かれ、①畑のがれきの片付け、②家屋内の「泥出し」、そして③土嚢作りなどの活動を行なった。このような作業は、現地・大槌町の災害ボランティアセンターに集約されたニーズを、当日集まったボランティアの人たちとマッチングして行なわれるが、グルー

金子さんは、この日の参加者について、「CVCに登録いただいた方には『CVCニュース』をお送りしていますし、プレスリリースによって地元紙『岩手日報』の紙面でも案内されています。それらによって情報を得、自らご応募いただいた皆さんです」と説明した。



「ボラバス」の対応は今回が3回目です。事務局なんですけど、平日は業務があるので週末の参加が多くなって」と語る久保真也さん(写真右)は、沿岸部の被災地、釜石市唐丹で育った。

分けはCVCに限らず、岩手県などが催行する他のボランティアバスでも行なわれているやり方だという。

同行した事務局のはたけやままさあき 畠山正昭さん

は、

「CVCは、いわて生協の組合員にとって、震災復興の『プラットフォーラム』（支援する人たちが集う拠点）として位置付けられています。岩手県は面積が広いので、内陸地方は震災当初のライフラインの寸断を除けば大きな被災はしていません。何とかして被災地に出掛け、支援したいという組合員の思いに応える機能を果たすために始めたのが、CVCのボランティアバスなのです」と話した。



斜面に作られた鈴木さんの畑の下は津波にのみ込まれ、更地が延々と広がっていた。

ボランティアの構成や その動機はさまざま

友人に誘われた人が2人の娘と一緒に参加したり、定期テストが終わったので友人を誘い、父親と共に参加した女子高校生、さらには、休日を利用して参加したいわて生協の店舗の職員など、ボランティアバスを利用して被災地に集まってきたボランティアの人たちの構成や、その動機は実にさまざま。

この日、畑のがれきを片付ける作業

を、ボランティアの人たちに

依頼した鈴木すずきりやう子りやうこさんは、

「震災があつて3カ月は、何も気力があつて3カ月は、何も、ようやく『何かを始めなければ』という気持ちになつて」と語った。りやう子さんのお連れ合いの奏すずむねさんも、母の家と、隣接する斜面の荒れ果てた畑を見つめながら、

「当時、この家には私の母と、

私の息子がたまたま居たので

すが、息子が母の手を引いて

坂を上つて逃げたので、津波

にのみ込まれずに助かりました。

生死を分けたのは、間一髪の

行動だったと思います」と感

慨を込めて振り返った。



CVCのボランティアは、女性の比率が高いのが特徴だという。右端は黒沢まゆみさん。



藤原由香ふじはらゆかさん(左端)に誘われた友人の及川典子おいかわのりこさん(右から2人目)は、大学生の長女、聡子さとこさん(右端)と高校生の次女、慕子もことさんと一緒にボランティアに参加した。

その家は、辛くも外観を保っているものの、内部は津波によって徹底的に破壊し尽くされており、あらためて戦慄せんりつを覚えた。畑があつた斜面の下は、泥土を積み上げた山がぼつんとあるだ

観光で被災地には来ないで

その日、CVCのボランティアバスを担当した運転手は高橋義信たかはしよしのぶさん。

「ボランティアの人たちは素晴らしいと思います。でも仕事だから、被災地をバックに子どもの写真を撮るような、観光客を乗せることだってあるんです。あれは切ないよね。観光客には来てほしいけど、被災地の観光は避けてほしいな」と、複雑な表情を見せた。



「実際に現地に来てみると、映像で見るとは全然違うよ。今でもつらいね」と語る高橋さん。

けで、あとは太古の姿そのままのよう
に、視界を遮るものは何もないのだ。
ボランティアに参加した黒沢くろさわまゆ
みさんと鈴木さん夫妻は、作業中、話
をしているうちに、共通の知人が津波
で犠牲になったことが偶然に分かつ
た。深い悲しみの共有の中で、復興を
誓い合う3人の姿が、立ち去りがたく
被災地に残された。